

海外ゼミ合宿2012参加者の感想文（帰国レポートより）

ゼミ合宿の感想 宮崎彩葵（1年生）

今回のゼミ合宿で初めて中国へ行ったが、食べ物も美味しくとても楽しい5日間であった。数々の史跡や博物館などを巡った中で一番印象に残っているのは万里の長城である。事前発表で扱った盧溝橋も実際に見ると写真とは違って素晴らしい景色ではあったが、特に万里の長城は教科書や資料集などの写真で見ていた景色を目の当たりにした時の感動と、写真からは伝わってこない迫力や大きさを体感することができた。実際に見て、歩いてみてわかることも多くあり、本などで学ぶだけでなく、実際に現地へ行くことの大切さを実感した。

歴史以外の面でも、中国の文化を学ぶことができた。レストランや王府井の屋台などで、中国のお菓子や北京ダックの珍味など、日本では食べたことも、見たこともないものに挑戦する機会が多くあり、経験の幅が広がった。

また、今回の旅行期間は尖閣諸島の問題で日中関係が揺れていた時期と重なっていたが、現地ではそんな雰囲気はほとんど感じることはなかった。日本に帰ってきてから見たニュースでは、中国でタクシーに乗ったら日本人とわかった瞬間に高速道路に降ろされたなどと報道していたが、私たちが乗ったタクシーの人はとても優しく、反対の車線で乗った方が安いとわざわざ教えてくれた運転手さんもいた。日本では中国は今過激で、中国の若者はみんなデモに参加しているかのような報道がされていたが、北京師範大の学生さんとの交流会では、日本が好きと話している方もいた。実際に自分の目で見て、体感せずに報道などを鵜呑みにすることの危険さを思い知った。そういった点において、今回この時期に中国へ行ったことによって得たものは大きかったと感じた。

反省点としては、中国語がほとんどわからない状態で行ってしまったことである。もし、もっと中国語が分かれば気づいたことや、人と交流する機会もあったと感じた。今回のゼミ合宿を通して中国を知り、好きになったので、もっと歴史と中国語を勉強して、必ずまた行きたいと思った。

藤田桃果（1年生）

全体的な感想としては、初めての海外旅行ということもあり、様々な経験が出来る良い機会となった。日中関係の悪化が心配されていたが何事もなく帰れたことも本当に良かったと思う。言葉が通じないということが大きな壁となったが、国内旅行では見えない異国の文化を直接体験できた。中国史からイメージできる中国像が歴史的観光地では勿論、近代化された建物や商店街、レストランからも中国という雰囲気を感じられた。私たちも京都などの歴史的な観光地を訪れると「日本だな」と感じることもあるが、海外観光客も日本のイメージは所謂和風のものだと思う。そんな外国人は東京の中心地や近代的な都市を訪れた時に日本の文化を感じているのかどうか、ふと疑問に思った。今回は時間の関係上、

北京市内でも見学できなかった場所も多く、中国は国内各地に魅力的な観光地に溢れているので、言語力をもう少し身に着けた際にはまた訪れたい。

感想 甲斐心泉（1年生）

天安門広場については日程の都合上深く見て回ることができず、事前調査発表では人民英雄記念碑や国旗掲揚台などもあげたが位置くらいしか確認することができなかった。だが、とにかく言えることはそのスケールの大きさである。今でも観光客で賑わいたくさんの人に埋め尽くされていたが、天安門広場は全体で50万人もの人を収容可能であり、かつてこの場でそんなにも多くの人が革命を起こし社会を変えようとしたのかと思うと、今日の人の多さも相まって過去に戻ったかのような不思議な気分になった。

北京ゼミ合宿全体の感想としては、北京に行ったことは今までに3回ほどあったのだが、事前学習をせず、予備知識が無いまま観光したので、せっかくの史跡も何で有名なのか、どこが見どころなのかも分からず見ていたため色々見逃してしまうことが多かった。しかし今回は参加する皆の事前調査をあらかじめ聞いていたために着目するポイントが分かり非常に有意義なものになったと感じた。今度からはどこを旅行するにしてもある程度予備知識を入れてから観光したいと思う。

富田菜月（1年生）

今回の合宿では一つの場所にあまり時間がさけなかったが、多くの場所を回ることができ充実した内容だった。特に万里の長城や紫禁城は以前から行ってみたいと思っていたため、実際に訪れてその場の空気を体感できたことは大きな収穫となった。ただ、語学の面では不十分のまま行ってしまったため、周りの人に頼らなければならなかったことが悔やまれる。中国語で簡単なコミュニケーションがとれる程度までになったら、また訪れたいと思う。

合宿を終えて 中川亜紀（1年生）

近年において最も激しいと思われる反日デモが起き、反日感情が高ぶるなかで、中国の政治の中心部であるともいえる北京を訪れたのは、良くも悪くも、非常に貴重な経験だったと思う。そんななか、抗日記念館や盧溝橋など、旧日本軍と関係のある場所に赴き、抗日記念館では中国軍の人々と一緒にまわる形になり、どうなることかと冷や冷やした場面もあったが、実際の北京で反日感情を実際に肌で感じることはほとんどなかった。

ずっと中国に興味があり、行ってみたいと強く思っていたので、ゼミの勉強をしながら、友人や先輩方、先生と5日間を過ごせたのは、本当に貴重な経験だった。

土屋天身（3年生）

旅行全体を振り返ってみると、とても濃い五日間だったと思う。有名どころには全部行

けた！という感じである。自由日には念願の北京国子監に行った。屋台グルメから先生に連れて行っていただいた全聚徳まで、おいしいものもたくさん食べた。中国のアイスは安いのにどれもおいしい。

また、自分の語学力のなさを反省する五日間でもあった。さぼらず努力しなければと思わされた。

尖閣諸島をめぐる日中関係が難しい時期だったが、むしろいい勉強になったという思いがする。うまくいかないこともあったが、日本では見られないものを見て、体験できた。

中国の歴史的建造物は例外なく大きい。写真を撮ってもおさまりきらない。巨大建築の代表が故宮と長城であろうが、私が印象に残ったのはどちらかといえば長城である。故宮はかつての中華世界の中心として、その壮麗さに感動したが、単純でひたすら長々とした長城の方が、それを築くに至った人びとの長い営みについて考えさせられるからである。

また北京に行きたいと思います。先生には引率をありがとうございました。

藤田友紀子（1年生）

私は今回のゼミ合宿で初めて海外へ赴いた。日中関係が悪化し、暴動などの恐れもある中の中国に数日間滞在したこと、また、北京の歴史的遺構および博物館等を見学して回ったことは、今まで脳内で想像していただけであった中国の本当の姿を垣間見せ、私の今後の歴史研究によい影響をもたらすであろう。

私が調査テーマに掲げた紫禁城は、1406(永楽4)年、明の成祖永楽帝の頃築城が開始され、1421(永楽19)年に南京から北京へと遷都してから、清朝滅亡まで宮殿として使用された宮城であり、1961年に中国国務院より国家重要文化財、1987年にユネスコより世界文化遺産に認定されている。私は3日目の集団見学と、4日目の自由見学の2回、紫禁城に赴いた。3日目は最も観光客で込み合う中央の道を延々と歩くだけであったため、広いということ以外の発見は何もできずに終わった。しかし、自由行動では自分でチケットを購入するところから始め、紫禁城のほぼ全域を自由に歩き回ったため、紫禁城や、中国の観光地管理における多くの発見をすることができる。

まず驚かされたのは、チケット売り場に偽学生証を貸し付けようとしてくる人がいたことだ。学生割引がある美術館、博物館は日本にも多くあるが、そのシステムを逆手にとって偽学生証を貸し付けてくるような人は日本にはいない。彼らは、学生と思われる年齢の人がチケット売り場に近づくと執拗に追いかけて偽学生証を10円で借りないか、と言ってくる。結局我々は偽学生証を借りることはなかったが、学生証があれば本来60円のところを30円で入場することができるため、彼らから偽学生証を借りる人も少なくはないのだろう。1日に数えきれないほどの外国人の学生が訪れるであろう紫禁城で、1人あたり10円で貸し出せば、北京市の平均日収の150元などは楽に稼げるのかもしれない。彼らは恐らく、学生割引の制度だけでなく、外国人との金銭感覚の差をも利用しているのだが、こう

いった商売も中国らしさの表れであろう。

紫禁城内部はというと、中央の道からそれると一気に観光客の数が減る為なのか、中央道以外の建物や道の整備はかなり杜撰であった。写真のように、舗装されておらずガタガタのままの道や、雨風により失われた箇所がそのままにされている建物などは数えきれないほどであった。また、倉庫や物の置き場所も、歴史的建物の一部にそのまま置かれ、それが建物の外側から丸見えであったり、更には荒地に自転車や謎の機械などが放置されていたりと、日本の観光地では到底見受けられないような光景の嵐だった。美術品の展示においても、ガラスケースの外側から眺める形式のものが多かったが、どのガラスも汚れきっていて、肉眼ではほとんど見えないものばかりであり、人が集まる所は整備するが、そうでないところは手を抜く、中国の観光地管理の実状に触れることができた。

管理状態はともかく、紫禁城の建築自体はとても素晴らしいものだった。一見普通に見える壁も注意深く見れば装飾が異なっていたり、左右に建てられた塔の内部の装飾が対になっていたりと、屋根の上に様々な動物の装飾がされていたりと、ただ歩いているだけでは見過ごしてしまうような細かい部分まで凝ったつくりになっていた。

西太后の改築により紫禁城がどう変わったのかを調査するために紫禁城に向かったのだが、建物自体がなくなっていたり、立ち入り禁止区域がパンフレットよりはるかに多かったり、建物の様式が展示のために悉く破壊されていたりと散々であったため、西太后と紫禁城の関わり方の調査は断念せざるを得なかった。しかし、宮殿であった頃の紫禁城と、観光地としての紫禁城の両方を同時に体感したことは、決して無駄ではなかったと思う。

紫禁城だけではなく、今回の中国訪問では、日本には到底わからないことを多く見聞きした。盧溝橋や抗日記念館に兵隊がいたことには驚いたが、彼らが中国人の観光客に写真撮影を頼まれると快く引き受け、隊列から抜けて写真を撮ってあげていたことは更に印象的だった。また、本屋では基本的に紐綴じで本を渡されること、駅では一々荷物検査があること、深夜は殆どのタクシーが停まってくれないことなど、多くの面で日本との差を体感することができた。そして何より、中国のテレビでは尖閣問題に対する会議を「平和的に解決」と報道していたのに対し、日本に帰国してみると、まったく正反対の言葉が新聞に載っていたことにも驚かされた。中国を訪れる前までは、日中関係が悪化している時に中国を訪れるのは自殺行為なのではないかとさえ思っていたが、危ない目に合うどころか、私たちが日本人だとわかっても優しい人が思いのほか多かったことは印象深い。現地で自ら見聞きすることの大切さを痛感させられた5日間だった。

【合宿の感想】城内あおば（1年生）

四日目の自由行動の日、頤和園に行ったとき、石畳に水をつけた筆で字を書いている人がいた。私たちがその達筆を眺めていると、その人はどこの国の人かと聞いてきた。私たちが、小声で「日本人です」と答えると、彼は地面に「中日青年友谊満歳」「欢迎日本朋友」

と書き始め、まわりに群がった中国人たちが不満そうな顔で何か言うのを宥めながら、私達の為に字を書き続けてくれた。私はその一生懸命な姿勢にこれからの私たちのあるべき姿があるような気がした。

最後にその人は、「中日青年友谊満歳」と書かれた和紙をバックから取り出して私たちにプレゼントしてくれたのだった。



記念館にいったばかりで気持ちがどこか重かった時だったけれど、記念館で歴史を学んできたからこそ、そのおじさんの有り難さが尚更実感できたのかもしれないとも思った。

また北京師範大学の校内を案内してもらった日に、朝はやくから校内で勉強に励む学生の姿を目にし、日本ではあまり見ない光景だったので非常に驚いた。実際、北京の学生と交流によって刺激をもらうことができた。北京合宿で得た経験を糧に、これからも、自分の目で実際に見て知ることによって学んでいきたい。

龔 曉霏 (3年生、上海出身の留学生)

今回の合宿で子供のときから念願の北京の旅を果たした。長城の迫力、紫禁城の膨大さ、参加するみんなの溢れる活気、いまだに強い印象が残っている。合宿はたったの五日間だが、この短い五日間を通して、歴史に対する興味が更に深まったのである。紫禁城や十三陵、宛平城や焦庄戸など、そこにあるものは必ず何かの意味がある、その背景に必ず歴史事実が秘められている。

今回は私の初めての北京なので、立派な歴史建造物に驚かされるほかに、北京の町並み、人々の生き様にも触れることができた。一番満足したのは、朝早起きして、「鸡蛋煎饼」を売っている店を見つけたことである。久々に「鸡蛋煎饼」を食べて、何か恋しい感情が湧いてきた。

永岡麻衣 (3年生)

北京を5日間旅行し、様々な観光地を訪れて思ったことは、広い、大きい、ということである。初日に行った円明園はとても広々としていたし、明の十三陵の定陵も広々としていて、紫禁城は歩いて歩いて城が沢山ある、という印象だった。北京動物園もとても広くて、全てを見ることはできなかった。今回の北京旅行では、万里の長城から眺める景色をはじめとして、それぞれの敷地の広さなどから、中国の広大さを肌で感じるこ

きたと同時に、皇帝に関係ある広々とした建物などを見学して、皇帝の権力の強さも感じることができた。

調査を終えて 田畑成基（1年生）

故宮の内側に張り巡らされている塼の意義とは外部からの侵入者を寄せ付けないという目的以外に、人間を内に閉じ込めておこうとする目的もあったのだと考えられる。それは個人の自由意志を抑圧せねばならぬほどに維持するのが困難な何かの存在を示唆している。文明化を果たした人類がいまだに完全にコントロールできない生殖に関して、極限まで対応した形態が一夫多妻制であり、それをより効率的に機能するようにシステム化した結果できたものが後宮なのである。子孫を残すことが第一の目的であるから、後宮では女性の人権は相対的に軽いものとされた。このようなシステムを設けなければ文明や社会が安定的存続を得られなかったという事実が、人類の愚かさを顕在化していると私は考えるのである。そして、現在人類は清王朝が健在であった時代から変わることができているか否かという問いに対して、いまだに世界各地で頻発している戦争や日中関係の昨今の緊張状態を鑑みるに、何ら変化を遂げてはいないと考えざるをえないのである。

<感想>大塚祐正（3年生）

今回の4泊5日の北京合宿を通して、私は中国の歴史を勉強する意欲がとても大きくなりました。その理由は、「歴史」を授業や教科書から知識として教わるだけではなく、実際に現地を訪れて、そこで直面する雰囲気や当時の様子を想像するおもしろさを感じることができたからです。自分の足でその場を訪れ、自分の目と耳で感じることは、行った人にしかわからない特別な経験・財産だと思いました。

また、団体行動の大切さも学びました。一人旅だと、自分のペースで好きなように行動することができますが、団体だとそうはいきません。ひとりひとりが自覚と責任を持ちながら行動する難しさを感じました。しかし、団体行動の良さもたくさんあります。それは、楽しさや喜び、苦勞をみんなで共有することができることです。それにより、仲間意識や団結心が生まれて、今回のゼミ合宿では最高の5日間を送ることができました。もし、また行く機会があれば、ぜひこのメンバーで行きたいです。

横島諒（3年生）

「王府井」を訪れた感想は中国の銀座と言われているように町並みも綺麗ですしショッピング街なので一日中楽しく過ごせると感じました。想像していたより人も混んでなかったですし、北京に旅行した際には絶対一度訪れたほうが良いと感じました。

北京合宿に行くと良かったと思うことは、見学等もちろんのことですが、この5日間

を通して3年生、2年生、1年生の壁を越えることができ、皆の中で仲間意識が芽生え本当に良かったと思える旅だったと思います。北京合宿のメンバーとの付き合いは今回だけに留まらずこれからも長く付き合っていきたいと思いました。また、自分としては、3年生ということで責任感を持った行動をとり、リーダーシップを発揮できたと思います。本当にいいメンバーに恵まれ参加して良かったと心から思います。ありがとうございました。